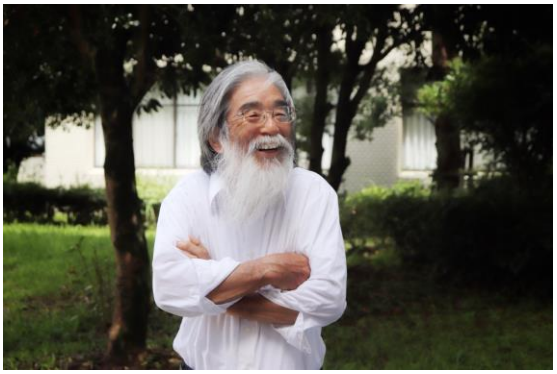
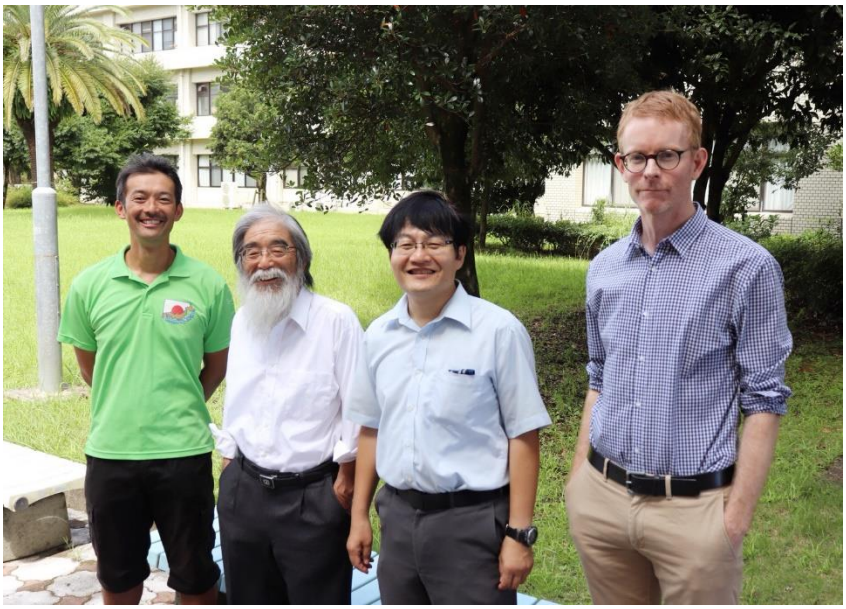
シンポジウム報告書

宮崎大学：３３０ホール
２０１８年１１月３０日

アングロ・サクソン侵略の系譜

寺尾智史・玉田吉行・杉村佳彦・Michael Schauerte・横山彰三





目　　次

Ⅰ　はじめに　玉田吉行

Ⅱ　シンポジウム「アングロ・サクソン侵略の系譜」: 概要／発表

シンポジスト：発表演題

1　玉田吉行 :「南部アフリカの搾取構造と人々の暮らし」

2　横山彰三 :「イランと米国：蜜月から対立へ」

3　杉村佳彦 :「塗りかえられたマオリの口承伝統――ジョン・ホワイトの原稿と情報提供者ウィリアム・コレンソー――」

4　Michael Schauerte :「アングロサクソン文化の真意－歴史事実と民族神話の対比」

5　寺尾智史（兼司会）:「非アングロ・サクソン系植民地におけるアングロ・サクソンの陰影――ギニア湾岸アフリカを中心に――」

6　コメンテーター：

Ⅲ　シンポジストの「書いたもの一覧」紹介

1　玉田吉行
2　横山彰三
3　杉村佳彦
4　Michael Schauerte
5　寺尾智史

Ⅳ　「シンポジウム」に参加して

1　玉田吉行
2　横山彰三
3　杉村佳彦
4　Michael Schauerte
5　寺尾智史

Ⅳ　ポスターとその他

Ⅴ　あとがき　玉田吉行

Ⅰ　はじめに

玉田吉行

シンポジウム「アングロ・サクソン侵略の系譜―」の報告書です。

文部科学省科学研究費（平成 30～34 年度基盤研究Ｃ、4030 千円）の交付を受けた「文学と医学の狭間に見えるアングロ・サクソン侵略の系譜―アフロアメリカとアフリカ」の成果を問うための第一回目シンポジウムの報告書で、今後も継続予定です。

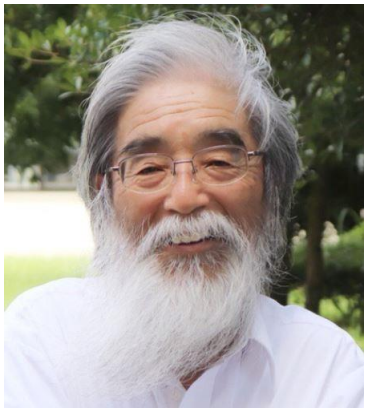
概要

Ⅱ　シンポジウム：概要・発表

１　玉田吉行（兼司会）:「南部アフリカの搾取構造と人々の暮らし」
２　横山彰三 :「イランと米国：蜜月から対立へ」
３　杉村佳彦 :「塗りかえられたマオリの口承伝統――ジョン・ホワイトの原稿と情報提供者ウィリアム・コレンソー――」
４　Michael Schauerte :「アングロサクソン文化の真意－歴史事実と民族神話の対比」
５　寺尾智史（兼司会）:「」

１　南部アフリカの搾取構造と人々の暮らし

語学教育センター
玉田　吉行



＜概要＞

この４月に科研費が来たのを機に「アングロ・サクソン侵略の系譜」でシンポジウムせえへんか？
やろやろ、しましょしましょ、いいですねと応じてくれはったのが、寺尾さん、杉村さん、シャワティーさん。司会をしてもらうつもりの一人の横山さんも発表者に。みんなそれぞれ教育・研究に熱心で、有能な人ばかり。いかに削って短かい時間にめとめるかが鍵になりそう。
寺尾さんはポルトガル、スペインにも住み、旧ポルトガル領のアンゴラやモザンビークも研究対象。杉村さんはニュージーランドで学位を取って、マオリの研究。シャワティーさんはアングロ・サクソン縁（ゆかり）のシカゴの人。横山さんは言語学、中東にも何度も足を運んで、統合後の共通科目では「イスラム文化論」を担当。それぞれがアングロ・サクソン侵略の系譜に関連する話をそれぞれの切り口で。シャワティーさんは起源に遡って。
僕は植民地支配の典型としての南アフリカの話です。
南アフリカには最初にオランダ人が、その後イギリス人が来てアフリカ人から土地を奪って課税をし、アフリカ人を安価な短期契約の賃金労働者に仕立てて、巨大な労働力搾取機構を打ち立てました。そして農場、工場、鉱山、白人家庭などで働かせて、搾取し続けて来ました。賃金は生活出来るかどうかの低賃金で、アフリカ人は現金収入を求めて田舎から仕事を求めて大都会に流れました。鉱山、農場などでは田舎の家族と離ればなれでコンパウンド（たこ部

屋）に住み、都市周辺ではスラムに住むことを余儀なくされました。
　今回は、その搾取構造とアフリカ人の暮らしについて話すつもりです。

＜歴史の流れ＞
１６５２年オランダ人到来→１７９５年イギリス人の到来→１８０６年植民地政府→１８３３年奴隷解放→オランダ系内陸部に移動→１８５４年棲み分け→金・ダイヤモンド発見→アングロボーア戦争→１９１０年南アフリカ連邦成立→１９４８年アパルトヘイト政権誕生

＜あれこれ＞
＊１９９２年のジンバブエ滞在でその実態を目の当たりに
＊アフリカにかかわるようになった経緯
　リチャード・ライトで修士論文→背景としてのアフリカ系アメリカ人の歴史→奴隷貿易でアフリカから連れて来られる→奴隷貿易の蓄積資本が産業革命を可能にし、植民地争奪戦に、その時の経済格差が今も形を変えて残存（二回の世界大戦を経て、多国籍企業による経済支配）
＊「文学と医学の狭間に見えるアングロ・サクソン侵略の系譜―アフロアメリカとアフリカ」科学研究費（平成 30～34 年度基盤研究Ｃ、4030 千円）

＜発表＞

２　イランと米国：蜜月から対立へ

医学部
横山 彰三

＜概要＞

ご存じの方も多いと思いますが、最近こんなニュースが世界を駆け巡りました。「トランプ米大統領がイランの核合意から一方的に離脱して半年。イラン産原油に対する禁輸制裁が５日に再開する（朝日新聞、2018 年 11 月 4 日）」。日本は半年の禁輸措置の猶予をアメリカから"頂いた"そうですが。

これを聞いてどこか既視感があるなと思いました。といっても私がまだ生まれる前です。1951 年イラン、それまでイギリスが独占していた石油利権を接収し石油国有化を宣言したのが時の首相のモサッデクでした。これに対しイギリスは直ちにペルシア湾に海軍を派遣し、国際的な石油企業と協力し各国に働きかけイラン石油を国際市場から排除します。一方アメリカは、当時イランで勢力を盛り返してきたトゥーデ党（共産党）の影響に危機感を抱き･･･時あたかも冷戦のまっただ中でしたから･･･イギリスとアメリカの特務機関の後押しによる国王（シャー）支持派のクーデターが起こり、モサッデク政権は崩壊。その後イランはアメリカの権益を代表する国王独裁体制へと進んでいきます。

因みに当時のパフラヴィー朝の前の王朝はカージャール朝といって遊牧民の連合体であるカージャール族による王朝でしたが、近代化・中央集権化に大きく後れをとっていました。イギリスにとってインドへの通過地点であるイランの重要性、またロシアにとっては歴史的に中央アジアとつながりのあるイランは戦略的に重要なところです。イギリスとロシアなど西欧列強によるイランの半植民地化が進行したのがカージャール朝末期 19 世紀後半。

さて、アメリカが支援したクーデターで国王独裁体制が確固たるものとなり、イランと米国は蜜月時代を迎えます。1970 年代、オイルマネーに沸くイランは軍事予算を拡大し 77 年にはアメリカ製武器の最大の輸入国となりました。軍事顧問団としてイランに滞在するアメリカ人も 2 万 4000 人（1976 年）。こんな時代があったのです。テヘランの街中にはバーやキャバレーが数多く、よく飲みにいったものだと当時イランに滞在していた私の恩師がペルシア語の講義中に懐かしそうに話していました。しかし、深刻なインフレと急激な近代化、アメリカへの接近、政治腐敗、貧富の差の拡大による国民の不満は頂点に達し、1979 年、ホメイニ師を中心

とするイランイスラーム革命により王政は崩壊しました。その後はご存じの通り、イランとアメリカは対立の道をたどり現在に至ります。
　アングロ・サクソンというか、国際政治に常に翻弄されるイラン。もともとは農業国ですが、オイルマネーと急激な近代化で都市部へと人口が流れ込み当時の農村部は壊滅的な打撃を受けたそうです。私は 14 年ほど前になりますが、イランに 8 ヶ月ほど滞在しました。革命後だいぶたってからです。そのときの体験も交えてお話ししたいと思います。

【参考図書：宮田律(著)『中東イスラーム民族史』中公新書】

＜発表＞

3　塗りかえられたマオリの口承伝統

――ジョン・ホワイトの原稿と情報提供者ウィリアム・コレンソー――
Fabricated Māori Oral Tradition: John White's Manuscript and Informant William Colenso

語学教育センター
杉村 佳彦

＜概要＞

南半球の緑豊かな小国ニュージーランドには、13 世紀頃（1250 年から 1300 年の間）に東ポリネシアから移住したとされるマオリ人が先住民として生活していた。文字を持たない口承文学豊かなマオリ語、マオリ文化はポリネシア系とは似て非なる独自の変化を築き上げ、マオリとして部族間で独立した生活や風習を営み、外部接触もないまま、1642 年にオランダ人探検家エイベル・タスマンにより発見される。その 127 年後、1769 年にイギリス人のキャプテン、ジェームズ・クックによりニュージーランドは正式にイギリス、ヨーロッパへ報告されることとなる。ヨーロッパ人の入植、つまりアングロサクソンとマオリの交流が始まるのであるが、初期の主目的は、オーストラリアからの商業（アザラシとクジラ漁）者が水と食料を求めて来たことによる支援、または、キリスト教宣教師による布教活動であった。

文化歴史背景として、ニュージーランドにいた先住民族マオリとしては、一度も国家形成、統一された歴史を持たず、部族間での内戦、戦士としての戦いにプライドをかけていた。そのため、共通する文化背景はあるものの部族により異なる伝承、伝説、風習を持っていた。しかしながら、書き文字文化を持ち合わせていなかったため、アルファベットを借用文字として使用し、その伝承を書き残すこととなる。そのためのキリスト教の受け入れ、野蛮な文化から西欧文化へ、布教活動でもあったのだが、宗教を学ぶだけでなく、西欧農業技術、貿易、それに加えて、識字率も上昇し、西欧文化の恩恵を大いに受けたのである。

その反面、マオリには免疫のなかった疫病が広がり、人口減少、一時期は消滅の危機に瀕した。そして、貿易により銃が入手できるようになり、内戦がより悪化し、それをうまく利用したイギリスの植民化搾取が始まる。もちろん、マオリはそんなことを知る由もない。イギリス移民

の流入により、印刷技術、書籍出版などももたらされるが、それらの技術に容易に近づけるマオリもいないため、キリスト教やアングロサクソン文化により西欧化が著しく進み、英語使用者も増加していく。

そのような時代の流れを受けた挙句 1840 年、ついにイギリス女王とマオリは、正式に条約を結ぶ。ワイタンギ条約である。マオリの代表的なリーダーが各地から呼び寄せられ、条約にサインをさせられるが内容に納得のいかないマオリ、またイギリス支配を歓迎するマオリなど様々な意見に分かれ、結局は食料が底をつくこととなる。おもてなし文化のマオリにとり、食料が底をつくことはこの上ない屈辱以外の何物でもない。そこで、お土産を手渡し、なりふり構わずサインをしてもらうべく、条約にサインをさせることに成功し、最終的には同年中に 512 のサインを集めた。内 39 人はマオリ語版条約にサインしたが、世界初の二言語（植民国と先住民言語）条約は、現在に至るまで異文化理解に苦しめられることとなる。このマオリ語版条約も翻訳者とは程遠いいほどのイギリス人が、条約締結数日前に簡単に訳しただけのものに過ぎなかったものである。

イギリス女王の保護を得て、従来のマオリ文化を継承することと思ったマオリであったが、条約を締結したことは、事実上の植民地化を意味するため、イギリス政府による土地搾取、不当な貿易や商業契約書にサインするという今までに見たこともない西洋思考、アングロサクソン文化に翻弄され、ついには、戦争に至り、イギリス政府により武力鎮圧されてしまう。また、文化面搾取にも本腰を入れたイギリス政府はマオリからいろいろなものを吸収しようとした。まずは、キリスト教による宗教的な実質的支配、すなわち、伝承や民話の塗り替えである。もともとポリネシアに共通とされる神話や民話は、実はキリスト神話と似ているところが多く、宣教師による神話塗り替えが知られているが、マオリにも共通する項目でもある。1879 年には、政府の命を正式に受けたイギリス人のジョン・ホワイトは Ancient History of the Maori の監修を行う。1887～1890 年に第六巻までが出版される。一部では、100 年以上も前に出版したマオリにおける部族間の民話や伝承をマオリ語で表記した数少ない非常に貴重な草創期の資料として称賛されている反面、近年の研究においては、その編者であるジョン・ホワイトが書いたとされる「原稿」は、実は、単なる引用、盗用、捏造、つまり塗り替えと切り貼りによるものであることが判明してきた。そこで、本発表では、マオリの民話と伝説を変えてしまったアングロサクソンであるジョン・ホワイトとは、一体どのような人物であるのかを紹介する。また、彼に関連し、情報を提供し、何らかの見返りを得たマオリ人グループ、またその情報提供の主犯格ともいえるウィリアム・コレンソーとは何者かをも明らかにし、なぜマオリの口承伝統がアングロサクソンによる負の財産となったしまったのか、そして、現在に至るまで真のマオリ文化として偽歴史を信じているのかを紹介する。

＜発表＞

４　アングロサクソン文化の真意－歴史事実と民族神話の対比

国際連携センター
E. マイケル・シャワティー

＜概要＞

「アングロサクソン」という用語は少し緩いですが、それはだいたい、英米・イギリス連邦等の人々や文化を示す意味で使われているようです。それに対して、ここにもう少し厳密の意味でのアングロサクソンを紹介します。要するに、ゲルマン民族の一派の「アングル人」と「サクソン人」（そして「ジュート人など」）がローマ帝国下の「ブリタンニア」を制圧した５世紀から、フランスの北部の「ノルマン人」がイングランドを征服した１０６６年までの約６００年の歴史を（たった１５分で！）紹介することに挑みます。その歴史的な出発点と最到達点は、ある意味で最初最後の「アングロサクソン侵略」でした。侵略する方と、侵略された方。その後に、イギリス帝国が様々な国々を侵略して、支配しましたが、その時点ではもうアングロサクソンはイングランドを支配していませんでした。なのに、何故かこのシンポジウムのタイトルは「ノルマン侵略の系譜」ではないようです。

アングロサクソンの支配がおよそ１０００年まえに終了したにも関わらず、今でその言葉を使うのは一つの興味深い現象だと思います。なぜイギリス内外でその言葉がイギリス文化などを示す意味で使われ続けたのでしょうか。それはおそらく二つの大きな理由があるからだと思います。一つは、明らかに、アングロサクソンの時代からの文化的、政治的な影響がその後の歴史に深く残されているからです。もう一つの理由は、イギリスのアイデンティティ問題に関連しています。要するに、イギリスとイギリス人の「独自性」を強調するために、どうしてもアングロサクソンの時代を高く評価する必要がありました。特に、フランスと戦争した時代に、「ノルマン人」の歴史より、ゲルマン系のアングロサクソンのことを強調する必要がありました。ただ、２０世紀に入ると、イギリス人の間に「ゲルマン系」ということがかなり″イメージダウン″になってしまいまして、それがまた「アングロサクソン観」の変化に繋がました

要するに、「アングロサクソン」という概念を理解するために、その実際の歴史とその後のイデオロギーの両面を見る必要があると思います。この短い発表で十分に、その両面を紹介するのはとても難しいですが、できる限り、アングロサクソンの時代とその時代に対する見方に関する概要を描いてみたいと思います。

＜発表＞

４　非アングロ・サクソン系植民地におけるアングロ・サクソンの陰影
――ギニア湾岸アフリカを中心に――

語学教育センター
寺尾 智史

＜概要＞

本発表では、ヨーロッパ域外のイギリス系植民地ではない、いわゆる「海外植民地」――とりわけ西アフリカのギニア湾岸地域――において、その植民地経営に「アングロ・サクソン的」、イギリス的要素が関わっているかについて述べる。

「ギニア湾岸」は、IHO（国際水路機関）の定義によれば、リベリアとコートジボワールの国境をなしているパルマス岬 Cape Palmas から、ガボンのロペス岬 Cap Lopez ということになる。この 2 つの岬を結ぶ海岸線は、コートジボワール、ガーナ、トーゴ、ベナン、ナイジェリア、カメルーン、赤道ギニア、ガボンの 8 か国に分けられている。本発表では、対象地域をギニア湾内に浮かぶ島嶼国であるサントメ・プリンシペ、さらに、別の定義ではギニア湾岸に含めることも多いロペス岬以南のコンゴ共和国、アンゴラの 2 か国を合わせて、計 11 か国とする。

すでにヨーロッパ列強から独立しているこれら 11 か国のうち、主たる公用語が英語である国はガーナとナイジェリアの 2 か国である。その他の国々では、英語がフランス語と並んで公用語となっているカメルーンがあるが、カメルーンではいわゆる「英語圏」はナイジェリア国境に近い狭小な区域に限られ、国土の大部分がフランス語圏となっている。他は、ポルトガル語が公用語のアンゴラおよびサントメ・プリンシペ、スペイン語が公用語の赤道ギニアを除いて、フランス語が公用語となっている。

ギニア湾岸地域では、コーヒー、落花生など、商品作物となる農産物のプランテーション栽培が盛んであるが、本発表では特に、チョコレートの原料、カカオ栽培について見る。

カカオ栽培は、カカオ豆の栽培、収穫において重労働が強いられる労働集約型の農産物であり、強制的な労働なしでは成り立たない構造に置かれてきた。原産地中央アメリカから主産地がギニア湾岸地域に移行して以来、この地域の英国植民地であるナイジェリアやガーナからの奴隷や契約労働者の、フランス領、ポルトガル領、スペイン領植民地でのプレゼンスは非常に高く、彼らなしではカカオ生産が成立しないか、効率が悪いにも関わらず、あまりの過酷労働で国際的な非難を受けるような形態になることが多かった。

また、文化面においても、この区域一帯で通用するピジン英語が、こうした労働者の言語としてのみならず、ギニア湾岸地域一帯で汎用されるいわゆる「リンガ・フランカ」としても通

用し、言語文化に深く根ざす位置を占めている。こうした状況をサントメ・プリンシペや赤道ギニアでのフィールドワークを通じて明らかにする。

＜発表＞

6　コメンテーター

III　シンポジストの「書いたもの一覧」紹介

1　玉田吉行

2　横山彰三
3　杉村佳彦
4　Michael Schauerte
5　寺尾智史

Ⅳ　「シンポジウム」に参加して

1　玉田吉行

２　横山彰三
３　杉村佳彦
４　Michael Schauerte
５　寺尾智史

Ⅳ　ポスターとその他

科研シンポジウム「アングロ・サクソン侵略の系譜」
Tracing the Actions of Anglo-Saxon Descendants over the past 500 years

2018年11月30日　午後2時30分～午後4時
宮崎大学330ホール（木花キャンパス　内）

玉田吉行特別教授（語学教育センター）
「南部アフリカの搾取構造と人々の暮らし」

横山彰三教授（医学部）
「イランと米国―蜜月から対立へ」

杉村佳彦専任講師（語学教育センター）
「塗りかえられたマオリの口承伝統―ジョン・ホワイトの原稿と情報提供者ウィリアム・コレンソー」

E.マイケル・シャワティー E. Michael Schauerte 助教（国際連携センター）
「アングロサクソン文化の真意―歴史事実と民族神話の対比」

寺尾智史准教授（語学教育センター）
「非アングロ・サクソン系植民地におけるアングロ・サクソンの陰影―ギニア湾岸アフリカを中心に」

本シンポジウムは日本科学振興会科学研究費基盤（C）「文学と医学の狭間に見えるアングロ・サクソン侵略の系譜―アフロアメリカとアフリカ」（研究課題/領域番号18K00419、研究代表者玉田吉行）の助成を受けている。

Ｖ　あとがき　玉田吉行

２０１８年１２月２６日　　たま

発行者：宮崎大学語学教育センター・国際連携センター・医学部英語科

Michael Schauerte（国際連携センター助教）
寺尾智史（語学教育センター准教授）
杉村佳彦（語学教育センター講師）
玉田吉行（語学教育センター特別教授）
横山彰三（医学部医学科教授）

発行日：２０１８年（平成３０年）１２月２６日

宮崎大学：〒**889-2153**　宮崎県宮崎市学園木花台西１－１
宮崎大学医学部：〒**889-1692**　宮崎県宮崎市清武町大字木原 **5200**

☎（寺尾）
Email:
玉田吉行ブログ「ノアと三太」
http://kojimakei.jp/tama/index.shtml